

第23回東西四大学合唱演奏会【1974年(昭和49年)6月16/17日】

フェスティバルホール／京都会館第一ホール



●関西学院グリークラブ

男声合唱組曲	作詩	伊藤整
雪明りの路	作曲	多田武彦
1. 春を待つ	指揮	北村協一
2. 梅ちゃん		
3. 月夜を歩く		
4. 白い障子		
5. 夜まわり		
6. 雪夜		

男声合唱組曲「雪明りの路」

関西学院グリークラブ
多田武彦

この組曲は昭和34年(1959年)8月に作曲、翌年1月関西学院グリークラブにより初演された。

北原白秋の「柳河風俗詩」と同様、この「雪明りの路」は、北海道小樽近郊に郷里を持つ伊藤整が、そこに詩の背景を求めて書き、「雪明りをよく知り、永久に其処を辿るあの人々」に捧げた詩集である。

私は以前から、この自由詩形式を主体としたみずみずしい一連の抒情詩の作曲を考えていた。自由詩による歌曲の作曲であるので、それまでの曲想をがらりと変え、「詩を朗読するつもりで語るように歌う」方式や、「合唱のもつ多くの声の量感や叫びや呟き」を随所に用いてみた。1960年7月東京でこの組曲が演奏されたとき、聴きに來られた伊藤整先生から「自由詩と音楽とを見事に結びつけてくれてありがとう。」と云って頂いたことを、今でも嬉しく想い起すことが出来る。

第1曲「春を待つ」は雪の多い暗かった冬のある日、久しぶりに晴れた日光のもとで、春へのあこがれを、語るように歌って行く。

第2曲「梅ちゃん」は、幼な友達の梅ちゃんの家が丸焼けになったときの悲しい思い出を歌ったもので、合唱の量感と、はかないテノールの中間部の流れとを対称的に用いている。

第3曲「月夜を歩く」では、誰もが経験するように、何事を考えるでもなく、とぼとぼと月夜の道を歩く感傷を、北国の情景とともに歌った曲で、終始、坦々と、語るように、呟やくように進んで行く。

第4曲「白い障子」は、秋が来て、白い障子がたてまわされたときの、あの環境の変化に対するふっとした気持ちを、さらっと歌って行く。前3曲と後2曲との間の間奏的な意味をもった曲である。

第5曲「夜まわり」は、目の赤くただれた、黒装束の大顔の夜番の無気味な声の、呟くように繰り返して、冬の夜の情景とをからみあわせながら歌って行く曲。

第6曲「雪夜」では、はげしい吹雪と、それがだんだん弱まっていつのまにか止んだあとには、案外明るくて、静かであお白い雪明りを、歌って行き、組曲を明るく終る。